

極樂と西方

定方 晟

佛教の極樂思想の起源はさまざまに論じられている。その中で、極樂に付随する西方の觀念の起源の解明はほとんど進んでいない。私はそれをエジプトやギリシアの樂園思想と關係づけたことがあるが、あまり話題にならない。今回は資料を追加して、改めてこの問題を論じてみたい。

極樂の觀念の起源に關する諸説は藤田宏達氏によってつぎのように纏められている。

◆インド外部起源説

- (1) ソロアスター教の太陽神起源説
- (2) ソコトラ島 (Sokotra) 起源説
- (3) 「エデンの園」起源説

極樂と西方 (定方)

- (4) エジプトの「アメンテ」ないしギリシャ神話の「地の涯のエーリュシオン」起源説
- (5) イラン高原のターク・イ・ブスターン洞に祖型を求め
る説

◆インド内部起源説

- (1) 大善見王の王城クサーヴァティの描寫
 - (2) 北クル洲神話
 - (3) 古ウパニシャッドに説かれる梵天神話
 - (4) 『律藏』に説かれる當時の佛塔の記述
- ほかに、ヴァルナ神、ヴィシュヌ神、ヤマ神等の神話がある。藤田氏自身はインド内部起源説に與し、「上記のインド側の諸説によって」極樂の觀念を構成する素材の大半を明らかに

にすることができるとし、「このように、種々なインド的素材にもとづいて、淨土經典の編纂者たちは、これを複合的に組み合わせて、極樂世界を描き出したものと考えられる」と述べている。ただし、西方の觀念については、「これを一義的に解決することは目下のところ困難である」と結論を保留している。⁽²⁾

初めに「極樂(安樂)世界」(Sukhavatī)を西方(pāścimā dik)に結びつける文を無量壽經と阿彌陀經によつて示し、以下、七節に分つて私の考えを述べらる。

- (1) 佛告阿難。法藏菩薩今已成佛現在西方。去此十萬億刹。其佛世界名曰安樂。(康僧鎧譯、無量壽經)⁽³⁾
- (2) 爾時佛告長老舍利弗。從是西方過十萬億佛土、有世界、名曰極樂。其土有佛、號阿彌陀。今現在說法。(羅什譯、阿彌陀經)⁽⁴⁾
- (3) pāścimāyāṃ diśīto koṭī..... (Larger Sukhāvativyūha) ⁽⁵⁾
§11)
- (4) asti pāścime digbhāga ito buddhaksetram koṭis
atasahasraṃ buddhaksetram atikramya Sukhā
vati nāma lokadhātuh. (Smaller S.82) ⁽⁶⁾

- (5) evaṃ pāścimāyāṃ diśī amītayur nāma tathāgato
..... (Smaller S.813) ⁽⁷⁾

一 佛典における方位觀

まず、極樂思想が誕生する前の佛敎において神々の世界がどの方角にあると考えられていたかを調べてみよう。

佛敎の古典的な宇宙論である須彌山説では、神々の世界は上方にある。忉利天(Trāyastriṃśat)、帝釋天(Indra)、兜率天(Tuṣita)、夜摩天(Yama)、梵天(Brahma)等の世界はこの順で上へ上へと重なっている。

忉利天(≡三十三天)の世界に關する長阿含の描寫を、望月佛敎大辭典の要約によつて示そう。

三十三天城は縱廣八萬由旬の大城にして、五百由旬毎に城門を置き、一一の門に五百の鬼神ありて三十三天を衛護す。中に七重の小城あり、縱廣六萬由旬にして、上に樓閣臺觀園林浴池等を設け、小城の外に中間に伊羅鉢龍宮あり。又その善見城内に善法堂あり、中に天帝釋の御座を敷く。堂に四門を開き、北に帝釋宮殿を構え、みな七重の欄楯、七重の羅網、七重の行樹を以て七重に周

匠嚴飾す。善見城の東南西北に鹿澁、畫樂、雜、大喜の四園林あり。その中、鹿澁、畫樂兩園の中間に難陀池あり、雜、大喜兩園の中間に畫度樹あり。みな善見城より階道を以て通ずることを得と云へり。又この天人の身長は一由旬、衣は長さ二由旬、廣さ一由旬、重さ六銖あり。天の千歳を以てその壽とし、淨搏食を食し、男娶女嫁の事あり、身身相近づき氣を以て陰陽を成すと云ふ。⁽⁸⁾

ここには極樂の光景に通じる記述（七重の欄楯、池）はあるが、忉利天を西に關係づける記述はない。正法念處經には十三天の名が詳しく列擧されているが、やはり西方の觀念はない。

須彌山世界觀には四洲 (catvaro dvīpāṅ) と四大天王 (catvārah mahārājikāḥ) に關連して、方位觀が見られる。すなわち、

▲四洲（漢譯語は晉代譯の大樓炭經⁽¹⁰⁾および唐代譯の俱舍論⁽¹¹⁾のもの。）

- 東 purva-vidēha (弗于逮、勝身洲)
- 南 dakṣiṇa-jambudvīpa (閻浮利、瞻部洲)

極樂と西方（定方）

- 西 apara-godāniya (俱耶尼、牛貨洲)
- 北 uttara-kuru (鬱單、俱盧洲)

▲四大天王（漢譯語は大樓炭經および佛母大孔雀明王經⁽¹²⁾のもの）

- 東 dhṛtarāṣṭra (提頭賴天王、持國天)
- 南 virūdhaka (毘樓勒天王、增長天)
- 西 virūpākṣa (毘留羅天王、廣目天)
- 北 vaiśravaṇa (毘沙門天王、多聞天)

四洲の一つは西に位置するが、他の三洲と同様、地上の俗界に屬し、極樂とは無縁である。四大天王の一つも西に在るが、やはり極樂とは無縁である。しかし、四洲の中の北俱盧洲は理想國と考えられているのでみておこう。大樓炭經中の描寫を望月佛教大辭典の解説によって示そう。

大樓炭經第一鬱單曰品に此の洲の狀勢を敘し、鬱單曰天下は周匝廣長各四十萬里あり、中に無數の種種の山あり。河の兩岸には種種の樹あり、河水徐行し、その中に種種の華あり。又兩岸に船あり、彩畫姝好にして金銀琉璃水精をもって作らる。洲の中央に浴池あり、廣長四千

里、その水涼軟にして清く、七重の壁をもって圍まれ、水底の沙は皆金なり。四面に陛あり、金銀琉璃水精をもって之を作る。池の中に青黃白赤等の蓮華あり、その華の光は四十里を照し、香もまた四十里に聞ゆ。若し彼の蓮根を斷たば、中より一種の汁を出す。その汁は乳の如く、味は蜜の如し。浴池の東南西北に各河あり。河水皆徐行し、中に種種の華あり。河の兩邊に種種の樹あり、岸は金銀琉璃水精をもって嚴飾せらる。また浴池の東南西北に各遊園あり、七重の欄楯、七重の交露、七重の行樹、周匝圍遶し、みな四寶をもって作らる。園中には香樹、衣被樹、瓔珞樹、不息樹、果樹、器樹、音樂樹等あり。その華實を劈けば、各その中より種種の香、種種の衣被、種種の瓔珞、種種の不息、種種の菓、種種の器、種種の音樂等を出す。また彼の人民は林樹の交曲せる下において臥起し、男女各その處を異にす。淨潔の粳米あり、耕さずして自然に生ず。若し食せんと欲せば、粳米を取りて之を炊ぎ、釜の下に焰珠を置くに、光自ら發して飯を熟せしむ。四方より人來りて悉く共に之を食し、食竟らざれば飯亦盡さず。盜賊惡人なく、教へざるも皆自ら十善を行す。男女專屬なく、若し姪欲の意起らば、

園觀の中に入りて共に相娛樂す。女人若し懷妊せば七八日にして子を産み、之を四通の道路に置くに、四方より來る者みな指を與えてくらしむ、指頭より乳自ら出づるを以てなり。生後七日にして長大し、恰も閻浮提の二十歳、若しくは二十五歳の人の如し。此の洲の人民は其の面色みな同等にして、身長各一丈四尺あり。髪は紺青にして、長さまた八尺あり。此洲の四方周圍に阿耨達池あり、後夜に雲起りて八味の水を雨らし、塵埃を洗滌す。到る處に草木を生じ、常に葉華實あり、足その上を踏むに陥下すること四寸、足を擧ぐれば還て復た故の如し。大小便の時、地劈けて中に没す、故に清潔にして衆糞臭處あることなし。死者あるも啼哭せず、好衣を着せしめ、之を四通の道路に置くに、鬱遮鳥 (uccārgana) 來りて其の尸を洲外に運ぶ。壽はみな一千歳にして缺減するものなく、死後忉利天ないし或は他化自在天に生じ、天上の壽盡きなば閻浮提に下生し、大豪貴もしくは婆羅門大長者の家に生ると云へり。⁽¹³⁾

ここには忉利天の描寫のなかに以上に極樂に通じる描寫がある(華、水底の沙金、四寶)。「北」を意味する言葉 utara は『長

阿含』「世記經」では「最上」の意に解されている。⁽¹⁴⁾

北クルのことはバラモン教（ヒンドゥー教）の文献にも現れる。アイトレーヤ・ブラーフマナでは、ヒマヴァット（ヒマラヤ山）の（インドから見ても）向う側にウッタラクルの國がある⁽¹⁵⁾とされているが、特に樂園とはいわれていない。マハーバーラタでは樂園とされている。「メールの北側に、シツダの住む神聖なるウッタラ・クルがある。ここでは樹々は甘い果實をつけ、常に花と果實におおわれている。花々はよい香りがし、……ある種の樹々はすべて願望をかなえる。……すべての土地は寶玉でできていて、繊細な金の砂に満ちている。……そこでは「男女の」雙子たちが生まれる。女性は天女のようなのである。彼らは甘露のようなクシールン樹の乳を飲む。……人々は無病で憂いを離れ、常に満足している。大王よ、彼らは一萬一千年生き、……。鋭い嘴を持つ強力なバルンダという鳥たちが、死んだ者たちを運び、峽谷に投下する⁽¹⁶⁾」。ラーマーヤナにもこれに似た記述がある⁽¹⁷⁾。

パールフトの浮彫り（前二〜前一世紀）には通行人が指を幼児の口に差し込む圖が表現されている。これらのことから、クル國神話はインドの廣範圍に知られていたことがわか

極樂と西方（定方）

る。しかし、西方の觀念はここにもない。

大善見王 (Mahasudassana) の城クサーヴァティーも理想國である。王は轉輪王（理想の王）であり、その國土には七重行樹木、四寶の葉實がある。しかし、西方の觀念はない⁽¹⁸⁾。佛塔の結構については、僧祇律に、欄楯、樹木、池、蓮華の語があるが、西方の觀念はない⁽¹⁹⁾。

以上の検討から窺われるように、樂園の描寫はステレオタイプであり、なら特定の樂園を指示していない。七重欄楯、七重羅網、七重行樹は須彌山にもあり、阿耨達池にもある⁽²⁰⁾。

つきに大乘經典の樂園（極樂を除く）の思想を見よう。

▲東 阿比羅提 (Abhirati)、阿閼佛の淨土、(阿閼佛國經)⁽²²⁾

▲東 淨瑠璃世界 (Vaidurya)、藥師如來の淨土、(藥師如來本願經)⁽²³⁾

▲南 離塵垢心世界、普現如來の淨土、(文殊師利佛土嚴淨經)⁽²⁴⁾

▲東南 蓮華淨土、(大乘悲分陀利經)⁽²⁵⁾

▲北 智水淨德世界、普賢菩薩の將來の佛土、(大乘悲分陀利經)⁽²⁶⁾

▲十方 「各方向に佛土あるも、省略」(大乘悲分陀利經)⁽²⁷⁾

▲同右 (兜沙經)⁽²⁸⁾

▲無量壽經 冒頭に述べた西を示す記述(二ページ)とは別に、十方の佛土の存在を述べる記述もある。²⁹⁾

▲南 補怛洛迦(山)(Potataka)、觀音の淨土、(新華嚴經³⁰⁾)
このように大乘經典でも、阿彌陀經典以外では、西方の重視は特に見られない。

二 ヒンズ園

西を特別視する觀念がインド内部に見出し難いとすれば、インド外部ではどうかであろうか。まず、岩本裕氏のエデンの園説を見てみよう。氏は述べる。

スカウヴァアティーとはユダヤ教やキリスト教に知られている「エデンの園」のエデン Eden の譯語ないしはその名にヒントを得た構成であると考えられる。エデンとはヘブライ語で「快樂」を意味するエーデンのアラム語形であるが、・・・

(氏はここでエデンの觀念がインドに影響を及ぼした文化的背景を述べ、つぎのように續ける。多少、文を變えて抄譯する。)

(スカウヴァアティーとエデンは)ともに方位觀の上に

立っており、しかも沙漠のオアシスの象徴であると考えられる・・・エデンという語は「平原」とか「沙漠」を意味するエディヌ edinu というアッシリア語と同語源である。エデンの園は『舊約』の「創世紀」によれば東方にあったとされ、そこから四河が流れていているという。この四河流出の傳説は、佛教神話で、アナヴァタプタ Anavatapia 池からガンジス河とインダス河とオクサス河とシーター河が流出しているという所傳と全く同じである。アナヴァタプタは「無熱惱」という譯語が與えられている通り、明かに沙漠のオアシスの神話化したものである。³¹⁾この池は、その岸が金・銀・瑠璃・水晶で飾られ、・・・清らかで冷い水をたたえているという。まさに、『無量壽經』に説かれる極樂はアナヴァタプタ池の所傳の擴大增補版であり描寫の誇張であるともいえる。・・・

こうして、西方における大沙漠の向うにあるオアシスは西方十萬億土の向うにある極樂として宗教的に昇華したことが知られる。もちろん、極樂の描寫に見られる華麗な建造物の描寫については、祇園精舎などの園林について古い傳承や、また今日サンチーやバールフット

の遺跡で見られる樓門・欄楯などがその原型になったことはいままでもない。⁽³²⁾

○カインは主の前を去って、エデンの東、ノドの地に住んだ。(創四・16)

われわれも「エデンの園」(ヘブライ語 gan-eden、英語 garden of Eden) について調べてみよう。「エデン」の語は「創世記」につきのように現れる。

○主なる神は東のかた、エデンに一つの園を設けて、(創二・8)

○また、一つの川がエデンから流れ出て園を潤し、そこから分れて四つの川となった。第一の川の名はピソンといい、金のあるハビラの全地をめぐるもの。第二の川の名はギホンといい、クシの全地をめぐるもの。第三の川の名はヒデケルといい、アッシリアの東を流れるもの。

第四の川はユフラテである。(創二・10-14)

○主なる神は彼(知恵の木の實を食べたアダム)をエデンの園から追い出して、彼に彼がそれから造られたその土を耕させた。彼を追い出したあと、命の木への道を守るために、エデンの園の東にケルビム(番人)と、回る炎のつるぎとを置いた。(創三・23-24)

極楽と西方(定方)

ここで注意すべきことは「エデン」が元來、「荒地地」を意味したことである。『新カトリック大事典』の「エデンの園」の項に「シヌメール語 edinu は『砂漠』『平原』を意味する。eden は『楽しみ』であるとするとする解釋は民間語源説による理解であろう」とある。すなわち、「エデンに一つの園を設けて」とは「荒地地にオアシスを造って」を意味する。「エデン」を「樂園」とする解釋は「創世記」以外の舊約聖書にすでに見られるが、これは「エデンの園」の「の」を同格の「の」(例、the city of Seoul、大統領のブッシュ)と誤解した結果であろう。

聖書ではパラダイスという言葉も使用されるが、これはペルシア語に由来する (Gk. Paradiesos, ∨ Pers. pairi-dāēza 「垣に囲まれた場所、庭、園」)。ハビアンは『破提字子』でエデンを「地上の極楽世界」(ポルトガル語 Paraiso terreal) と説明している。

エデンの園は地上のどこかにあったようである。「一つの川がエデンから流れ出て園を潤し、そこから分れてピソン、

ギホン、ヒデケル、ユフラテとなつた」といわれ、ヒデケルはチグリス川に、ユフラテはユーフラテス川に同定できるから、四河の源流はトルコ西部のどこかということになる。『キリスト教大事典、改定新版』につきの文がある。「パレスチナから（東の方）（創二・八）と言われるので、メソポタミアの一地方と想像されるが、地理的には明らかではない。」パレスチナの東に位置する荒地地といえは、シリア砂漠がそれに當たる。その中の園とはチグリス川とユーフラテス川の上流あたりを指すのであろうか。

神はアダムをエデンの園から追放し、エデンの園の東にケルビムとつるぎを置いたという。神はアダムが戻られないようにしたのであろう。エデンの園がメソポタミアの一地方だとすれば、その東とはイランの山地あたりをいうのであろうか。カインが追放されて住んだ「エデンの東」がそれと同じならば、その地はノドと呼ばれる。ヘブライ語 *Nodh* は“(Country of) homelessness”を意味する *sofuf* である。

岩本氏は極樂とエデンはともに方位觀の上に立つといつている。しかし、エデンに關する方位は東ばかりである。岩本氏は東と西の違いを説明していないが、エデンはユダヤ教徒にとっては東であっても、インド人にとっては西であるといひ

たいのであろうか。「西方における大砂漠の向うに、云々」という氏の言葉は氏がそう考へてゐることを示唆している。

しかし、方位に關するこのような「換算」はあまりにも地土的であり、死者の世界を考へるのには相應しくない。十億土の彼方という表現にも相應しくない。極樂思想が誕生したと思われる西曆前後には東西の交流は盛んだったはずである。メソポタミアあたりからは極めて當たり前の人間がインドに來ていたのである。そんな世俗的な場所を死者が赴く聖地と考へることができたであらうか。そもそもキリスト教徒が再生を願つたのは天國であつてエデンの園ではなかつたのではないか。

岩本氏はエデンの園から流れる四河流出の傳説がアナヴァタプタ池の四河流出の考へに影響を與えたといつてゐるが、肝心の極樂淨土に四河流出が述べられていないのはなぜか。

三 ターク・イ・ブスターン

杉山二郎氏は砂漠のオアシス、とくにイランのササン朝の遺跡ターク・イ・ブスターン（樂園のアーチ）の意）に極樂淨土の構想の起源を見て、つぎのように述べる。

湧水を回遊させ花壇を造り、樹木を植えて緑蔭を作り、芝生を植えて樂園のイマージュを昂める一方、その前に大きな池を構築して清冽な水を満々とたたえて、洞窟の影を投じている。この池が佛説阿彌陀經の極樂變相圖の蓮池を思わせてならない。聖なる水の信仰が凝って、樂園淨土の構造布置にまで及んだと、わたくしは見たのである。⁽³³⁾

氏はさらに洞窟の浮彫りの「生命の樹」や鹿狩の場面に不老不死（無量壽^{アミタユス}）との關連を見出す。鹿狩については、氏は鹿の若角や袋角の陰乾が長壽健康増進薬とみなされていたことをあげる。⁽³⁴⁾

しかし、氏も認めるように、淨土經典の成立はターク・イ・ブスターン洞の成立時期（五〜六世紀）に先行している。⁽³⁵⁾氏は結局、この遺跡に先行する遺跡に極樂思想の起源をシフトさせざるをえなかった。

氏はこの遺跡がどうして極樂の西の觀念を生んだか、明確にはのべていない。つぎの言葉からは氏が岩本氏と同じように方位の「換算」をしたことが窺われる。「中國の佛教徒、商工業者らにとって、玉門の西の流沙の苛酷さを知れば知る

極樂と西方（定方）

程、その彼方胡人らの説く樂園と重ね合わせた阿彌陀淨土を夢想し、・・・」⁽³⁶⁾

四 アメンテ・エーリュシオン

以上、西方の觀念を種々の樂園思想の中に求めてみたが、これと思われるものを見出すことはできなかった。ところが、古代エジプトとギリシア神話に死者の世界に結びつく西の觀念がある。なぜ誰もこれに注目しないのだろうか。インドとエジプトは地理的にも文化的にも隔絶していると考えているからだろうか。しかし、問題になっている時期はヘレニズム時代である。エジプトのプトレマイオス王朝とインドのマウリヤ王朝のあいだには外交的交渉があった。プトレマイオス王朝の末期からローマ帝政時代にかけては通商も人の交流も盛んであった。そのエジプトに「死者の書」と稱するものがある。死者が死者の國に無事に入れるように書かれたいわば冥界案内書である。少なからぬ墓から「死者の書」が発見され、それらが総合された結果、現在、一九〇章が復元され、「死者の書」完全版と呼ばれるものが出版されている。ハルムハビ (Harmhabi) の墓のテキストがマスペロによって佛譯されているので、それを見てみよう。⁽³⁷⁾

Āment		the "hidden" place, or land, the West, the abode of departed spirits, the name of the first division of the Other World. A late form of the name is
Amentī		
Āmentet		

1. アメンテの字義、Budge, A Hieroglyphic Vocabulary to the Theban Recension of the Book of the Dead, 1911, p.41.

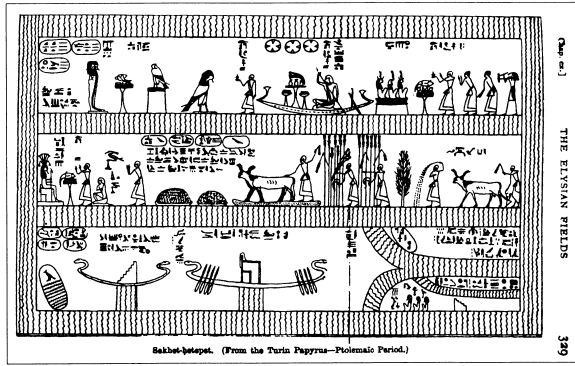
は幸いをえて来たったのである。汝の従者は汝を抱く、おお、主の寵兒のあいだに惹なく赴く汝よ、(また)非とさるべき何ものをも持たぬ汝よ！ おお、オシリス・ケントIIアメンティよ、かれ心地よき微風をもたんことを許されよ、かれ生けるものの國の讚め祀らるべき人の列にあらんことを許されよ、オシリスIIハルムハビよ！」

左に及び右に三艘の大きな帆船がただ一列に並んで、ハルムハビとその妻の坐るゴンドラを網で曳く。右手は「オシリス・ウンノフリにつき従うための、アビュドスへの平和の渡航である。——偉大なる主は汝たちとともにあり、西方に(Occident)、西方に、正しきものの土地！汝が愛せし場所は嘆きつつ叫ぶ。汝を曳くもの全て

Sekhet-Āanru (or Āaru)		the "Field of reeds", i. e., the Elysian Fields.
Sekhet-ḥetep		the "Field of Peace", or "Field of Offerings"; a name of the Elysian Fields.

2. 樂園を意味するエジプト語、Budge, A Hieroglyphic Vocabulary ..., p.371.

文中、オシリスとは死んで蘇り、死者の國の王となったエジプトの神である。以後、死んだ人間はオシリスに同化して蘇るといふ思想が生まれた。ウンノフリ(Ounnofri, Unnet)はオシリスがもつ数多くのタイトルの一つで、バッジ著 A Hieroglyphic Vocabulary によると、"the well-doing Being" のような意味を持つ。アビュドスはナイル川中流域にある聖地で、プルタルコスがつぎのようにいつている。「エ



3. エジプトの楽園、Budge, The Book of the Dead, 1899 (Rep. 1974), p.329.

ジプト人の中でもとくに裕福な人、あるいはとくに有力な人々はアビュドスに葬られています。ですが、これは、とくにオシリスが葬られているのと同じ所に葬られるという見栄を張りたいからだと申します³⁸。「オシリスハルムハビ」はオシリスとなったハルムハビを意味

のような世界であった。

バッジ著「The Book of the Dead」には大英博物館所蔵ハアニのパピルスVの英譯がある。ハアニのパピルスVは書記のアニが自分の墓室に納めるために生前に作製したもので、美しい挿繪(頭畫)とヒエログリフによる解説文(本文)からなる。前一五〇〇年—一二〇〇年頃のものとしてされている。その中から、「死者の書」完全版の第八章と第一一〇章にあたる部分を、田中達の譯によって引用しよう³⁹。第一一〇章は阿彌陀の本願との關連で選んでみた。

〈第八章〉

【頭畫】アニは白衣を着し、左手には杖、右手にて紐を持ちながらアメンタの象徴の方へと、歩みつゝあり。

【本文】日中アメントトを通して、(且つ之を出で来る)章。オシリスハニは曰く、『ウンヌの都(ヘルモポリス)開る。噫トトよ、我首は密封せらる、而してホオラスの眼は強し。我は神々の父ラアの額に赫々として輝くホオラスの眼を救へり。我はアメントトの住者なる同じオシリスなり。オシリスは彼の日を知る。又オシリスは其活くべき期間中は、活くべきを知る。而して我も亦是

する。

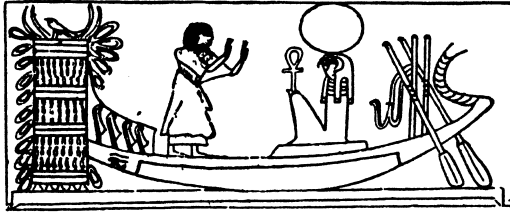
ケントIIアメントイ(Khent-Amenti)は「アメントの主」を意味し、この「アメント」が「西」を意味すると同時に「死者の國」を意味し(寫眞1)、それはまた「葦の野」「平和の野」と呼ばれ(寫眞2)、エジプト人にとっては圖(寫眞3)

極樂と西方(定方)

と等しきことを知り得ざるか。我は神々の中に住ふ月の神なり。我は滅ぶることなかるべし。此故に、噫ホオラスよ、起ち上れ、何となれば（オシリスは）神々の中に汝を算入したればなり。』

「オシリスニアニ」は「オシリスとなつたアニ」を意味する。

[From the Papyrus of Nu (Brit. Mus. No. 10,477, sheet 16).]



Vignette: The god Rā, hawk-headed and having upon his head the sun's disk, seated upon the cubit of Maāt in a boat; before him he holds the emblem of "life." Above him is the legend, "Rā in his shrine." With him, in the boat, stands Ani, who "maketh adoration to Rā each day," with both hands raised in adoration.

4. 『死者の書』第133章、Budge, The Book of the Dead, p.400.

ホオラスはオシリスとイシスの子で鷹で象徴される。その眼とは太陽を意味するのかも知れない。ラーは太陽神であり、『死者の書』第一三三章には「ラーは地平線に昇る。伴の神々をつれて。神は祕處より現わる・・・」という文がある（寫眞4）。エジプト人の再生の觀念には太陽が日々あらたに出現する現象が結びついている。死者の國が西にあるとされるのも太陽が没する方角と關係がある。

〈第一一〇章〉（抜粹）

願くは彼等をして我を支配せしむるなかれ。願くは我に汝の田を報賞せよ、噫汝へテプの神よ。汝の本願たるものを、汝は行はん、噫風の主よ。願くは我の其處にてクウとなるを得んことを。願くは我の其處にて食ふを得んことを。願くは其處にて飲むを得んことを。願くは我の其處にて耕すを得んことを。願くは我の其處にて苅り入るを得んことを。願くは我の其處にて戦ふを得んことを。願くは我の其處にて愛を結ぶを得んことを。願くは我の其處にて大なるを得んことを。願くは我の其處にて、決して奴隸状態にあらざらんことを。却て願くは我の其處にて權威赫々たらんことを。

「死者の書」の傳統はプトレマイオス朝時代にも生きています。つぎの例はその時代のもの (Papyrus of Kerasher) である。

May Osiris, the Governor of those who are in Amennet, the Great God, the lord of Abydos, grant a royal oblation; may he give offerings of cakes, and ale, and oxen, and wine...

五 プトレマイオス朝とサラピス

プトレマイオス朝時代にサラピス (Sarapis) という神が登場する。これはオシリスのヘレニズム版である。これについて、マヤールはつぎのように書いている。

サラピス信仰はアレクサンドリアで前四世紀の末あるいは三世紀の初めにプトレマイオス朝の初期の王たちによって創始された。これは王家につながる神をもち、かつギリシア人とエジプト人がともに崇拜できるような神をもちたいという王たちの願望から生まれたものである。したがって、サラピスはその性格を一方ではハ

極樂と西方 (定方)

デスやディオニュソスから受けつぎ、一方ではオシリスから受けついだ。のちには醫神アスクレピオスの特徴も加わった。こうしてこの神は死者の世界の神であると同時に豊饒の神となり、のちには信者の夢に現れる醫神ともなった。サラピスは次第にアレクサンドリア人の神になった。その信仰はアレクサンドリアの商人たちによって、また P・M・フレイザーにしたがえば「プトレマイオス朝の退役官吏」たちによって東地中海一帯に廣められた。前三世紀には、その信仰はギリシアや小アジアの大都市、さらには恐らくイランにも存在した。カスピ海の東南で発見された刻文は、そこにサラピスに捧げられた神殿が存在したらしいことを示している。ローマ人がエジプトを支配すると、この信仰は新しい發展を遂げた。サラピスは女神イシス、および兩神の子ハルポクラテス (Harpokrates) と密接に結びついた。ハルポクラテス (ホル・パ・ケレド (子供ホルス)) がエジプトのホルス神 (Horus) に關係することはいうまでもない。ファイユーム出土のテラコッタ——その大部分は西暦の最初の二世紀に屬する——はこれらの神の人氣を物語っている。三神はそれぞれ單獨で表現されることもあれ

ば、二神で、あるいは三神で表現されることもあった。サラピスは時代の宗教的要求によく應える一種の世界的な神となった。人々はサラピスを Zeus-Sarapis とか Helios-Sarapis とか呼んだ⁽⁴²⁾。

ヘーヨブも同様のことを述べている。次の文はその要約である。

サラピスはギリシア人の王朝であるプトレマイオス王朝がエジプトに古くからある神オシリスをギリシア風に取り替えた神である。サラピスの語源は Osiris-Apis (Osor-Hapi) であるところ⁽⁴³⁾。

イシスの信仰はエジプトのアレクサンドリアに發し、ギリシアやイタリアを含む地中海一帯にひろがった。

プトレマイオス二世(在位、前二八五—二四六)のころ、サラピスとイシスへの寄進が盛んにおこなわれた。前二〇五年には、デロス島に最初のセラペウム(サラピス神殿)が建てられた。サラピスの信者の集團は Sarapiastai と呼ばれた。アントニウスはイシスの衣服をまとったクレオパトラ(在位、前五一一—三〇)に戦利品を

ささげた。ポンペイの出土物はヴェスヴィウス山の噴火時(西曆七九)、イシスとサラピスの信仰が盛んだったことを示す。

ローマの歴代の皇帝たちがこの信仰をもった。カリグラ(三七—四一)は、オシリスの死と再生を記念して、宮廷の一室にエジプトのシンボルである蓮、stupa、ウラエウス、有翼の日輪を描かせた。この室はのちに aula isiaca と呼ばれるようになった。

一三二—一三三にアレクサンドリアで發行された銅貨にはサラピスとハドリアヌス(在位、一一七—一三八)の像が並べて表現された。

セプティムス・セヴェルス(在位、一九三—二一一)はサラピスを拜するためにアレクサンドリアへ旅した。カラカラ(在位、二一一—二一七)は貨幣にサラピスの姿をした自分を刻ませた。かれは「サラピス愛好者」(Philosarapis) と呼ばれた⁽⁴³⁾。

オシリス信仰に關する以上の編年をマヤールの論文で補助しよう。

ヴェスパシアヌス(六九―七九)はアレクサンドリアのセラベウムを訪れた。

ハドリアナスはサラピスに黒花崗岩で刻んだ牡牛の像を捧げた。

トラヤヌス(九八―一一七)はサラピスの像を刻んだ硬貨を發行した。⁽⁴⁴⁾

サラピスについて詳述する古典作家にプルタルコス(四六頃―一二〇以後)がいる。かれはその著『イシスとオシリスについて』でつぎのようにのべている。

プトレマイオス・ソテル(プトレマイオス一世)は夢の中でプルトンの像を見ました。彼はそれまで本物を一度も拜んだことがなかったので、それがどんな像であるのかは知りませんでした。しかしとにかくそのプルトンの像が彼に、一刻も早くアレクサンドリアへ連れて行くと命じたのです。ところが彼はその像がどこに建てられているのかも知らず、困り果てて友人たちに夢の話をしてまずと、ソシピオスという名の、いろいろな所に旅したことのある人物が見つかって、彼の言うことに、プトレ

極樂と西方(定方)

マイオス王が見たと信じているような像を、彼は黒海南岸のシノペで見たというのです。そこでプトレマイオスは、ソテレス、ディオニュシオスの兩名を派遣しましたが、二人は多くの日数を費やし、またさんざん苦勞を重ねた末(それに神のお導きもないわけではありませんでした)、像を盗んで運び去りました。そして運ばれてきたのを検分した結果、神託や前兆の解釋者であるティモテオスと、ナイル河口セブンニュトスのマネト、および彼らの一統の者たちが、これはプルトンの像だと断定しました。その根據となったのは、番犬ケルベロスと蛇を伴っていることでした。そして王はこの二人の説明から、これはサラピス以外の何者でもないと確信したのでした。無論この像がシノペから運ばれてきた時は、サラピスという名をもっていたわけではありません。アレクサンドリアに着いてはじめて、この名を與えられたのです。しかし肝心なのは、サラピスとはプルトンのエジプト名だということです。事實、有名な自然學者のヘラクレイトス(前六一―五世紀)が「ハデスとディオニュソスは同一の神だ。いずれの神を稱えるにも、信者は狂い立つ」と言っているのを聞きますと、こういう見解に到

達するでしょう。肉體のことをハデスと呼ぶ、なぜなら、魂は肉體の中で言わば酔いつぶれて、魂であることをやめてしまうから、と言う人がいますが、あれは無理をしてこじつけのアレゴリーを述べていると言つてよいでしょう。それよりは、オシリスをディオニュソスと、そしてサラピスをオシリスと同一視するという方がよい（オシリスは死んでその本性を變えた時にこの呼び名を得たのです）。それゆえサラピスは、オシリス同様、すべての人々が共通して拜する、これは祕儀に入信した人ならばよく知つてゐることです。⁽⁴⁵⁾

私としては、もしサラピスという名がエジプト語であるならば、それは「喜び」という意味を表わしているはずだと思ひます。その論據は、エジプト人は「喜び」の祭禮のことをサイレイと呼んでゐるということです。プラトン（『クラテュロス』四〇四B以下）によりますと、ハデスというのは、彼を知つてねんごろになつた者たちから、「知つてゐる」、「好意的な」神と名づけられた結果だといふのですから。エジプトには、名前が大事な意味を持つてゐる例がまだほかにたくさんあります。例えば、死後人間の魂が行くと彼らが信じてゐる地下の國

は、アメンテスと呼ばれますが、アメンテスというのは「取りかつ與える者」といふ意味です。これもまた、昔ギリシアから出た語で、それがギリシアに逆輸入されたといふ例の一つなのかどうかは、あとで検討することにし
ましよう。⁽⁴⁶⁾

プルタルコスがアメンテスの語義を「取りかつ與える者」としてゐるが、これはコプト語にもとづく解釋らしい。柳沼重剛氏はアメンテスにつきのように注してゐる。「アメンテス（エジプト語でアメント）は『地下の國』ではなく『西』。ただしコプト語の文書の中には『地下の國』となつてゐるものもあり、プルタルコスの中に『取りかつ與える者』といふ語源説明もそのコプト文書から説明できるといふ。⁽⁴⁷⁾」

プルタルコス以外の人の證言にも觸れておこう。アイリオス・アリスティデス（一一七—一八九）はサラピスに「救濟者にして靈界導師」（*sôtēr kai psykhopompos*）といふ形容詞を付してゐる。⁽⁴⁸⁾

アプレイウス（西曆二世紀）はその小説 *Metamorphoses*（通稱『黄金のロバ』[*Asinus Aureus*]）の第一章の中でこの宗教について述べてゐる。そこにはサラピス、オシリス、

イシス、エーリュシウムの園、鎌首をもたげた毒蛇などへの言及がある。記述はどこまで事實に即しているかわからないが、その祭禮の行進の華やかさには一目おかざるをえない。主人公ルキウスがイシス女神の祕儀に與る場面は作者の體驗を反映しているように思われ、次の文は短いながらこの祕儀の一面を窺わせる。「わたしは黄泉の國に降りていき、プロセルピナの神殿の入口をまたぎ、あらゆる要素をとおってこの世に還ってきました。眞夜中に太陽が煌々と輝いているのを見ました。地界の神々にも天上の神々にも目のあたりに接して、そのおひざ元に額ずいてきました。」⁽⁴⁹⁾

エリアーデはこれにつきのような解説を加える。

「あきらかにわれわれは、ここに死と復活の體驗をみるのであるが、その具體的な内容はわかっていない。入信者はハデスの所まで降りていき、宇宙の四要素をとおってもどつてくる。入信者は夜の闇のなかで太陽が輝くのをみる。このイメージは、地下の世界をまわる太陽神オシリスの夜の旅に係するものである。それから、入信者は他の神々のもとへ行き、沈思黙考し、閑近で神々を崇拜する。この謎めいた説明のなかに、入信者が神々の像で飾られた地下の世界をあらわす数々の穴をとり抜け、突然あかるく照された小部屋に到

極樂と西方(定方)

着する過程が暗示されているとする者もある。また、學者のなかには、超心理學や催眠術の體驗を思い起す者もあった。實のところ、確實にいえることは、密儀に加わった者がついには自分を太陽神オシリス、またはホルスと同一であると感じるようになるということである。⁽⁵⁰⁾

西曆二世紀にはエジプトに四二のサラピス寺院があったという。その中で最も重要なのは勿論アレクサンドリアのそれであった。⁽⁵¹⁾

古代ギリシアにも樂園は西にあるという考えがみられた。ストラボン(前六四—二一以後)は『オデュッセイア』(四・五六—)の「エーリュシオンの野」に關する文を引用したあとでつぎのように書いている。「なんとなれば、ゼビュロスの清らかな空氣とやさしい風はともにまさしくこの國に屬するのだからである。というのも、この國は西にあるだけではなく、暖かいからでもある」⁽⁵²⁾

また、「ヘスペリデスの園」も、西の方、太陽の没するところ、オーケアノス(極洋)の涯に位置し、黄金の實を結ぶ樹があり、ヘスペリデス(「黄昏(ヘスペロス)の娘たち」)が常に歌い舞っている。⁽⁵³⁾

ニルスソンによると、エーリュシオンの觀念はエジプトから

傳わつたものらしい。⁽⁵⁴⁾

六 サラピス信仰の東方への傳播

イシスとサラピスの信仰がエジプトから西で盛んであった様を見たが、東ではどうであつたらうか。アフガニスタンのギリシア人の都市遺跡アイハヌムから出土した刻文にインドローラ⁽⁵⁵⁾（イシス神からのさずかりもの）という女性の名があつた。西暦前一世紀後半、アフガニスタンのガズニーまで旅行し、『バルティア旅程記』を書いた人の名はインドローラス・カラクスである。カラクス（下メンポタミア）は出身地、



5. サラピス、ベグラム出土、J. Hackin: Nouvelles Recherches Archéologiques à Begram, Planches, Paris, 1954, Fig. 323. 日本經濟新聞社『アフガニスタン古代美術』圖版 73.

インドーロスはインドローラの男性形である。これらの事例は東にもイシスの信仰が傳わつた可能性を窺わせる。

一方、インド邊境から中央アジアにかけてサラピスとハルポクラテスの像が発見されている。サラピスの像は頭に柵を載せた姿で表わされることが多い。柵は豊饒の象徴であらう。ハルポクラテスは口に入さし指を當てた少年の姿で表わされることが多い。この仕草はブルタルコスによると、沈黙の徳を示している。⁽⁵⁶⁾

この兩神の像の出土状況は、マヤールによると、以下の通りである。

▲サラピス像

(1) ベグラム（アフガニスタン）（フランス隊発見）

〔寫眞5〕

(2) ホータン（大谷探検隊発見）⁽⁵⁷⁾

(3) フヴィシカの硬貨。SARAPPOの銘。(Rosen-field) 〔寫眞6〕。

▲ハルポクラテス像

(1) タクシラ（マーシャル発見） 〔寫眞7〕

(2) ベグラム（フランス隊発見）⁽⁵⁸⁾

極樂と西方(定方)

- (3) トウルファン (大谷探検隊発見)⁽⁵⁹⁾
- (4) フヴィシカ(?)の硬貨。OROEの銘。(Rosenfield)

〔写真8〕

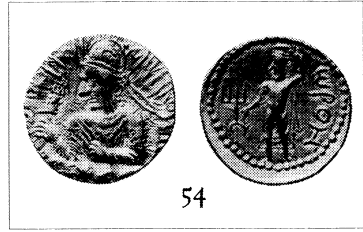


PLATE V. Sirkap: bronze statuette of Harpocrates.

7. ハルポクラテス、タクシラ出土、AD 60 頃, Marshall, A Guide to Taxila, Fig. 1.



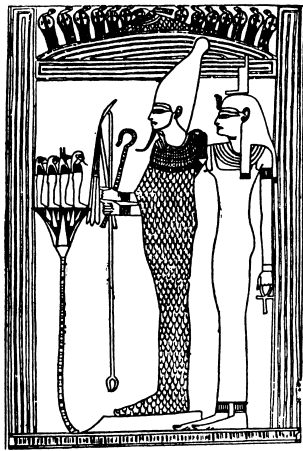
6. サラボ、Rosenfield, The Dynastic Arts of the Kushans, Coin 57 (Cf. 186, 187).



8. ハルポクラテス、フヴィシカ硬貨、Rosenfield, op. cit., Coin 54 (Cf. 202, 203).

- (5) バクトリア (アフガニスタン)⁽⁶⁰⁾
 - (6) 出土地不明、在東京⁽⁶¹⁾
 - (7) フェルガーナ (ロシア)、石製、一〇二世紀⁽⁶²⁾
 - (8) デイルベルジン・テペ (ウズベキスタン) 翡翠の沈み彫り (ソ連隊発見)⁽⁶³⁾
- ハルポクラテス像 (4) の OROE を A・マリクは Horus (ハルポクラテスのエジプト名) に同定しているという。⁽⁶⁴⁾ ハルポ

[From the Papyrus of Ani (Brit. Mus. No. 10,470, sheets 29 and 30).]



9. 『死者の書』第125章、Budge, The Book of the Dead, p.356.

クラテス像の沈み彫り(8)をグルネは現地の作品と見て、西暦前Ⅲ—Ⅳ世紀に中央アジアにセラピス信者がいたと考⁽⁶⁵⁾える。ほかにスワートとパンジャブの出土品がハルポクラテスとの関連で論じられている⁽⁶⁶⁾。

七 結論

マヤールによると、サラピスは「死者の世界の神、彼岸の神」である。これはサラピスと阿彌陀に共通点があることを示す。一方、サラピスの原型であるオシリスの世界は西(アメンテ)にある。これはサラピス(オシリス)の世界と阿彌陀の世界に共通点があることを示す。

サラピス信仰はアレクサンドリアを中心にヘレニズム文化圏に廣範圍に廣がったらしく、東歐ではイシスへの寄進文が多数発見され、インドの邊境ではサラピスに關係する遺物が発見されている⁽⁶⁷⁾。

しかし、サラピス信仰についてはそれ以上の詳しいことがわからず、その信仰がインドでどの程度に知られていたのかもわからない。Taddeiは東歐のイシスへの寄進文を譯しているが、それらのほとんどは、某がイシスに何々を寄進する、という内容しかもたず、阿彌陀信仰との関連を示す手掛かり

を示さない。イシスは女神であるから、その点からも阿彌陀との関連を見出すのは困難である。

極樂の觀念に關するエジプトないしギリシアの影響の決定的な證據はない。エジプトの樂園につきものの農耕の光景(寫眞3)は佛教の樂園の光景からはほど遠い。しかし、西の觀念の起源を考える場合、エジプトないしギリシアの宗教思想を輕視することはできないであろう。ここではインド風の十方の一つとしての西でなく、專一的な西の觀念が存在し、極樂の西の觀念との関連を強く示唆する。

エジプトないしギリシアの宗教思想が佛教に影響を與えた文化的背景としてヘレニズム文化がある。これについて考えるとき、明治以後の日本と歐米文化の關係に思いをいたすのが役立つだろう。日本の佛教徒は今日、「天國にいる○○ちゃん、成佛して下さい」といって何の疑問も抱かない。創價學會では教會という言葉を使っている。最近、浄土眞宗では從來認めなかつた祈りを認めることにしたという。これらは歐米文化の影響を示す。同じようなことがヘレニズム時代に起きたのではないだろうか。

ヘレニズム時代のエジプトのインドへの影響を示すと思われるものに、佛教におけるパールフトの浮彫りのナーガ像や

サンチーの浮彫りの蓮華座や、さらに大乘佛教の蓮華化生の觀念がある。これらのアイデアはすでにエジプトにある(寫眞9)。オシリスの前の蓮の上に四神がおりオシリスの後ろのイシスの頭飾りと上方の列にウレウス(コブラ)の姿がある。栴尾祥雲『曼荼羅の研究』にも頭に圓盤とウレウスをつけ、蓮の上に坐すハルポクラテスの圖が掲載されている。

しかし、佛教は異文化から影響を受けても、佛教でなくなるということとはなかった。私は佛教が他の文化を受け入れるということの意味を、人間が食物を消化して自己のものとするのと同じと考える。人間がそれによって成長するならば、他國の食物を攝取することは何ら恥ずべきことではない。大乘佛教全體がそのようにして生まれてきたのである。

- (1) 定方辰「西方淨土・アメンテ・エリユシオン」、宗教研究 二〇九號、一九七一
- (2) 藤田宏達『大無量壽經講究』、眞宗大谷派宗務所出版部、一九〇、一一四—一一六頁
- (3) 大正藏二二、二七〇上
- (4) 大正藏二二、三四六下
- (5) 荻原雲來他『梵藏和英合璧淨土三部經』五八頁
- (6) 荻原雲來他『梵藏和英合璧淨土三部經』一九六頁

極樂と西方(定方)

- (7) 荻原雲來他『梵藏和英合璧淨土三部經』二〇四頁
- (8) 長阿含經(卷二〇) 切利天品(後秦弘始年佛陀耶舍共竺佛念譯)「大正藏一、一三一上—一三七上」、望月辭典、三九二—三九三
- (9) 正法念處經(卷二五)「大正藏一七、一四三—一四三三」
- (10) 大樓炭經(卷一)「大正藏一、二七七下—二七八上」
- (11) 俱舍論(卷一一)「大正藏一九、五七下—五八上」
- (12) 大樓炭經(大正藏一、二九三—二九三下)、佛母大孔雀明王經(大正藏一九、四二二—四二三中)
- (13) 大樓炭經(卷二)「大正藏一、二七九下—二八一上」、望月辭典、二一九中—二一九下。北クル(爵單曰、爵單越、北俱盧)の記事は以下のものにもある。『大樓炭經』(西晉譯、大正藏一、二七七下)、『長阿含』「世記經」閻浮提洲品(後秦譯、大正藏一、一一五中)、『起世經』(隋譯、大正藏一、三二一中)、『起世因本經』(隋譯、大正藏一、三六六中)。ちなみに、鬱遮鳥は後出マハーバーラタのバルルンダ(Bharuṇḍa)とともにゾロアスター教の鳥葬を想起させる。
- (14) 大正藏一、一一九中
- (15) Aitereya Brāhmaṇa, 8-14; A.B. Keith (tr.): R̥gveda Brahmanas. The Aitareya and Kauṣṭaki Brāhmaṇas of the R̥gveda. (HOS), 1920 (Indian Rep. 1971), p.331.
- (16) Mahābhārata, 6-8. 譯は上村勝彦譯『マハーバーラタ』6、ちくま學藝文庫、四〇頁による。

- (17) Ramāyana, 4-43. ほかに次下参照。J. Muir: Original Sanskrit Texts of the Origin and History of the People of India, Vol.1, 1967 (2nd ed.), p.491f. Uttarakuru の名はギリシア・ローマにも知られていた。プリニウス (NH.6.20) によると Attaracorae 族の土地はヒュペルボレイイ族 (北方人) の土地と同じように氣候温暖である。プトレマイオス (Geo. 6.168) によると、いまの中國領中央アジアあたりに Otorokorra 市があつた。
- (18) Dīgha-Nikāya 17.
- (19) 摩訶僧祇律 (卷三三) 「大正藏一三、四九七中—四九九上」
- (20) 『長阿含』「世記經」 「大正藏一、一一四下」
- (21) 『長阿含』「世記經」 「大正藏一、一一六下」
- (22) 大正藏一一、七五四中。外に道行般若經 (六)、維摩經 (下)、法華經 (三) にある。
- (23) 大正藏二四、四〇一中
- (24) 大正藏一一、八九九中
- (25) 大正藏三、二三四中
- (26) 大正藏三、二五六中
- (27) 大正藏三、二八五上—二八八上
- (28) 大正藏一〇、四四五上、以下。『舊華嚴經』盧舍那佛品 (大正藏九、四〇五下、以下) にはあらゆる方角に無数の佛利があることが説かれる。
- (29) 大正藏一一、二七二下
- (30) 大正藏一〇、三六六下
- (31) 望月佛教大辭典 (阿耨達池) も同様の見解をのべている。「これ (四河流出) 頗る古代の傳説にして、西洋諸國の耶穌教徒の間に傳えられたるが如く、かの聖書に見ゆる四大靈河は即ちこれと同種の説話なるべし」
- (32) 岩本裕『佛教事典』(佛教聖典選・別卷)、讀賣新聞社、一九七八、一一八下—二〇中。(地獄と極樂) 三二書房、一九六五)
- (33) 杉山二郎『極樂淨土の起源』筑摩書房、一九八四
- (34) 同書、四四^六
- (35) 同書、二三五^六
- (36) 同書、一六六一—一九七^六
- (37) M. G. Maspéro, Étude sur quelques peintures et sur quelques textes relatifs aux funéraires, JA, Série 7, XV, p. 150.
- (38) プルタルコス著、柳沼重剛譯『エジプト神イシスとオシリスの傳説について』岩波文庫、四五^六
- (39) E. A. W. Budge, The Book of the Dead, 3 vols, 1899 (Rep. 1974, Routledge & Kegan Paul), Chapter 8 (Vol I, p.56), Chapter 110 (Vol II, p.319f.). : 田中達譯『死者之書上』世界聖典全集刊行會、大正九年。
- (40) Budge, The Book of the Dead, p.400.
- (41) Budge, The Book of the Dead: Facsimiles of the papyri

- of Hunefer, Anhai Kerasher and Netchemet...1899, p.38.
- (42) Monique Maillard, A Propos de deux Statuettes en Terre rapportées par la Mission Orlani: Sarapis et Harpocrates en Asie Centrale, JA, 1975, pp.225-226.
- (43) Sh. K. Heyob: The Cult of Isis among Women in the Graeco-Roman World, Brill, 1975, chapter one.
- (44) Maillard, op. cit., p.226.
- (45) プルタルコス著、柳沼謙、前掲書、五五一-五七七頁
- (46) プルタルコス著、柳沼謙、前掲書、六〇〇頁
- (47) プルタルコス著、柳沼謙、前掲書、一九六頁
- (48) Aelius Aristides [117-189] (XLV, 25): John E. Stambaugh: Sarapis under the early Ptolemies, E. J. Brill, 1972, p.18 以下
- (49) Metamorphoses, XI・23 (吳茂一譯『黄金の神話』ト、中波文庫、一六四頁)
- (50) シルチア・エリアーデ著、島田・柴田譯『世界宗教史』II、一九九一、三〇九頁
- (51) ERE, Vol.6, 1959 (1st Impression, 1913) p.376f. [Graeco-Egyptian Religion]
- (52) Geographia, 3-2-13.
- (53) 吳茂一、ギリシア神話 上、新潮社、一九五六、二二六頁
- (54) M. P. Nilsson: The Minoan-Mycenaean Religion and its Survival in Greek Religion, Lund, 1950 (2nd revised ed.), 極楽と西方 (定方)
- p.627.
- (55) P. Bernard: Communication: Campagne de Fouilles à Ai Khanoum (Afghanistan), CRAI, 1972, pp.618-619.
- (56) トマタノリス著、柳沼謙、短評、一一六頁
- (57) Maillard, op. cit., Fig. 1.
- (58) J. Hackin: Nouvelles Recherches Archéologiques à Bégram, Planches, Paris, 1954, Fig. 322.
- (59) Maillard, op. cit., Fig. 3.
- (60) G. Lecuyot: Un harpocrate bactrien, Bulletin of the Asia Institute, 12, 1998, pp.113-119, Fig. 1.
- (61) Katsumi Tanabe: Iconographical and Typological Investigations of the Gandharan Fake, Bodhisattva Image Exhibited by the Cleveland Museum of Art and National Museum, ORIENT Vol XXIV, 1988, Pl. IV-a.
- (62) B. Brenjtes: A Figure of Harpocrates from the Farghana Valley, East and West, 1971, Fig. 1 (facing to p.76.)
- (63) F. Grenet: Trois Documents religieux de Bactriane Afghane, Studia Iranica, 1982, pp.155-162.
- (64) Maillard, op. cit., p.227.
- (65) F. Grenet, op. cit., p.155-157.
- (66) M. Taddai: Harpocrates-Brahmā-Maitreya. A Tentative Interpretation of a Gandharan Relief from Swāt, *Dialoghi di Archeologia* 3 (1969), pp.366-367. A. D. H. Bivar:

東洋の思想と宗教 第二十一號

Journal of the Numismatic Society of India 23 (1961), p.319
et pl. VII (9). [G. Lecuyot, op. cit., note 33 12-14, 18°]

- (67) Sarolta A. Takács: *Isis and Sarapis in the Roman World*, Brill, 1995.